



こうこう 「皎々とのぼる」



11月ともなると、月は皎々と(=明るく、清らかに)照り輝き、夜空を彩っています。深まる秋のその静けさを彩るような見事な月です。

同じ「皎々と」という表現を、詩の中で効果的に使っている詩に出会いました。そして、その詩を書いた詩人に興味を持ったので、お知らせします。

それが、ことによくすみわたった日であるならば

そして、君のところが、あまりにもつよく

説きがたく 消しがたく

悲しさにうづく日なら

君は この坂道をいつまでも

のぼりつめて

あの丘よりも もっともつと高く

皎々と のぼってゆきたいとは おもわないか

(^{やぎじゅうきち}八木重吉「皎々と のぼってゆきたい」)

詩は、^{けいけん}敬虔なクリスチャン詩人として知られた八木重吉の書いたものです。二児の父親であり、高校の教師でもあった彼は、若くして病のため亡くなりましたが、その残された詩は、何れも清らかに澄み切った心情を歌っていて、今も読者が絶えません。

詩の中で、詩人は君(つまり読者)に向かって、人生の坂道を登りつめて行こうと呼びかけているのです。しかも、照り輝く月に照らされるように、皎々と登って行こうと言っています。ためらいや迷いや、悲しさや後ろめたさに臆することなく、人生の坂道を丘の上の向こうまで、自分の納得できるまで登って行こうではないかと呼びかけています。詩人が君と言っている相手は、多分若者かもしれません。坂道の登り際で、悩み苦しんでいる人達かもしれません。その君に向かって、皎々と登って行けと励ましているのです。空高く輝く満月の光に照らされて、ただひたすらに急な坂道を登って行く人の姿を想像してほしいと思います。

皎々と照る月の光に輝きながら、人生の坂道を明るく登って行くと考えることも、ふさわしい生き方ではないでしょうか。